

人新世で問題となる「政治思想」の措定する前提

—チャクラバルティ

『惑星時代における歴史の風土』を手がかりに—

前田 幸男 *

I. はじめに

比較的気候が安定していたとされる完新世（Holocene）が終わりを迎え、すでに新しい地質年代に入ったのかどうか、論争が続いている。21世紀初頭、パウル・クルツェンは、その新しい地質年代を「人新世」と呼んだが、その正式名称はいまだに確定されていない。層序学（stratigraphy）での議論をはるかに超えて、資本新世や死新世といった候補がいくつも提起されている。これについて、ポヌイユとフレソズは温室効果ガス（GHG）の大気中濃度をどう抑制するかといった議論はときとしてあまりにも大きな物語となりがちで、それだけをもって人新世概念を理解したつもりになることがもっとも危険な行為であるとした（Bonnieuil & Fressoz, 2016）。どの呼称が他の呼称よりも優れているかといった些末な論争に嵌まらないよう注意すべきであり、重要なのは複数の歴史が折り重なったものの総称として人新世を理解すべきということになるのだろう⁽¹⁾。

ただし、人新世をめぐる論争の中でも、気候危機に関わる大規模自然災害や相次ぐ新たな人獣共通感染症の登場などを現在の資本主義システムを押し進めた帰結として捉え、「資本主義システムからの脱却」にこそ注力すべきであるという議論がとりわけ活発であり、その延長上に資本新世の概念が登場していることには注目しておきたい。資本主義が鍵を握ること自体に異論はないだろう。なぜなら、ヒトはエネルギー使用を含む消費活動と直接関係し、そのことにわれわれ一人一人が無関係な態度をとることは不可能だからだ。

しかし、その存続の可否を含めた資本主義のあり方だけに注目しても、現代の人類

(1) その意味で、新たにプランテーション新世やクトゥルー新世（Haraway, 2015）といった呼称が登場しているが、その背景や理由を吟味することに意義があると言える。

が直面している問題の解決への糸口を見つけないということは明言しておきたい。この点について本稿では、まず、人類の活動の総体によって立ち現れつつある危機を「負の普遍的な歴史 (negative universal history)」(Chakrabarty, 2021, p. 48) として理解する歴史学者のディベシュ・チャクラバルティの議論を手がかりとしながら、現在の複合危機へ対処するために、なぜ資本主義の議論だけでは十分ではないのか第1節および第2節で論じる。その上で、第3節および第4節では、逆説的だが人新世では人間は自律的に決定できない状況であるにもかかわらず、危機に対して人間間の取り決めだけで応じてしまう理由が、政治思想の中核的な前提の中にあることを論じる。第5節では、チャクラバルティの議論の課題を示し、それをどのようにして補い、発展させることができるのかについて論じ、稿を閉じる。

II. 資本主義批判からの偏向？

まずチャクラバルティとスラヴォイ・ジジェクとの間の論争を紹介したい。チャクラバルティは、近代の勃興を牽引してきた比較的短い資本の歴史と、地球や生物種という観点に立ったディープ・ヒストリーの2つの歴史の存在を挙げ、これら2つを一緒に考察していくという立場に立っている(Chakrabarty, 2021, p. 65)。これに対して、ジジェクは「まず資本制的生産様式の特殊な行きづまりを解決してはじめて、(人間という種の生存という) 普遍的な問題を解決できるのである。…生態学的危機についての手がかりは、生態系そのもののうちにはない」と明言しており、資本主義を問題の中心に置かないチャクラバルティを厳しく批判してきた(Žižek, 2011, pp. 333-334; Chakrabarty, 2021, p. 66も参照)。これはジジェクに特有の立場ではなく、マルクスの資本論を研究の中心に据えてきた者を含む多くの社会学者たちがおこなって繰り返している見解である。

関連して、アンドレアス・マルムとアルフ・ホーンボルグは、「地質学者や気象学者、その同僚らは、必ずしも人間同士(そして必然的に人間と人間以外の自然との間)で生ずる出来事を研究するのに十分な知識を身につけているわけではない。岩石の組成やジェット気流のパターンなどは世界観や財産、権力といった現象とはかなり異なる」(Malm & Hornborg, 2014, p. 66)として、伝統的な自然科学と社会科学の区分を擁護する。そして、「人間界では…、気候変動に関する種思考は神秘化と政治的麻痺を助長する。それは、旧態依然たる既得権益に挑戦するための基礎にはなり得ない」(Malm & Hornborg, 2014, p. 67)として、気候危機は社会の不平等や不正義といっ

た問題について焦点をあてるべきで、種の観点から気候危機を考えようとするアプローチはそれらを見えなくさせることから批判する。日本の研究者で言えば、土佐弘之も同様に種思考を以下のように厳しく論難する。「地質学的エージェントとしての人類ということを強調すればするほど、結果として、人間社会内における環境正義、特に同時代における南北問題（貧困者が気候変動の負の影響をより大きく受けるといった問題）、および世代間正義の問題（未来の世代が気候変動の負の影響をより大きく受けるといった問題）、さらにはそれらと密接に関連している人間中心主義（種差別）の問題が視野の外に追いやられることになってしまう」（土佐, 2020, 54-55 頁）。

こうした批判に対して、チャクラバルティは明確に「危機全体を資本主義の物語に還元することはできない。資本主義の危機とは異なり、ここには金持ちや特権階級のための救命ボートはない」と論じている（Chakrabarty, 2009, p.221; Chakrabarty, 2021, p.45）。彼が資本新世ではなく人新世という名称にこだわる理由として、一つは気候の影響を受けるのに貧富は関係ないということが挙げられるだろう⁽²⁾。もう一つは、現代の危機が資本主義によって加速したことは認めるものの、資本主義が勃興するはるか以前の農耕の発明、定住の開始、さらにはヒトが木から降り陸上で生活し始めた時にまで遡った根源的なディープ・ヒストリーをも視野に入れようとしたからという点も挙げられる（Chakrabarty, 2009, pp. 212-213; Chakrabarty, 2021, p. 36）。

しかし、チャクラバルティの議論の真骨頂は、気候危機の無差別性や超長期の時間的遡及を行ったからという点にあるわけではない。実際、気候危機の影響は貧者により多くのしかかっている。温帯パラダイムの中で、しかもエア・コンディショナーが完備された建物の中で生活する者は、その固い殻で守られており、その点でチャクラバルティは批判されている。さらに超長期の地球史を参照するというのは、地球システム科学者らがすでに研究を蓄積してきた分野であり、チャクラバルティが初めて論じたわけではない。

(2) 関連して興味深い論点として COVID-19 が挙げられる。アンドリュー・ドブソンは COVID-19 が社会的に差異化された経験を人々に与えたのと同じく、種としての経験も受けたことに注意を促している。条件さえ揃えば、無差別に感染するということから、ウィルスが生物学的な種としてヒトを宿主にしたことは、紛れもなく種思考でなければ理解できないことであったことを論じている（Dobson, 2022, p. 129）。このことは、つまり、人間が、人間間の活動の歴史と、地球への物理的な力の歴史を、同時に生きているという意味で「二重化された人間像 (the doubled figure of the human)」（Chakrabarty, 2021, p. 4）になっており、そのことを常に意識しなければならないことの傍証といえるのではないだろうか。

そうではなく、これらの批判に対するチャクラバルティ自身の応答に切れ味がないために隠れてきた重要な論点とは、近代のプロジェクトを支えてきた社会／自然の二分法に対する現実のハイブリッド性を強調するブルーノ・ラトゥールの問題意識 (Latour, 1997) や、フィリップ・デスコラが論じる「自然主義」(Descola, 2005) の問題意識を引き受け、歴史学という分野の再構成を提唱しながら、同時に政治思想における暗黙の前提が抱えるそもそもの問題点を指摘したことにある。そして、その暗黙の前提を崩し、新しい政治思想を構成しない限り、気候危機を乗り越えることはできないことを示唆している点にあるのだ。この点について次節では、チャクラバルティの議論を再考する形で、先に述べた種思考に対する批判者たちが見逃しているノン・ヒューマンとしての気候の特性について論じる。

Ⅲ. 「気候という野獣」にどう向き合うか—持続可能性から生息可能性へ

チャクラバルティも認めているように、気候危機をはじめとする様々な複合危機に対処する上で、資本主義そのものが鍵を握っていることは論を待たない。人間種が行う特異な活動として、呼吸以外に、経済活動で収益を上げるために GHG を追加的に排出することが挙げられる。資本主義はこの GHG の追加的排出を加速させる上で鍵を握るシステムを構築することができるため、それをいち早く止めることが急務となる。ただし、大気中と海洋にすでに排出されてしまった GHG が蓄積している。それらが気候そのものの動きをどのように変えるのかは未知であるとしか言いようがないのだ。チャクラバルティは気候科学者の議論を参照しながら、二酸化炭素 (CO²) の濃度がある閾値・臨界点を超えると安定した気候に引き返せなくなるが、そのような「気候野獣 (climate beast)」に変容する臨界点がどの程度の速さで、いつ来るのかを予測することはできないがために、予防的なアプローチを用いるしかない点を強調している (Chakrabarty, 2021, pp. 52-56)。

たしかに、地球温暖化が顕在化する以前から台風やハリケーンの甚大な被害は存在した。しかし、いまやこうした爆弾低気圧の頻発化はこれまでの人為的に排出された GHG の蓄積が原因であることが国連気候変動に関する政府間パネル (IPCC) によって科学的に証明されている。資本主義のもとで過去 150 年間にわたって蓄積された GHG がもたらす災害にどのように対処するのかという深刻な問題が、大気中と海洋中にすでに蓄積されてしまった GHG とともに残されている。資本主義システムを転換し、GHG の排出が止まれば、危機の穴進はいったんは止まるかもしれない。しかし、

残された GHG はどうなるのだろうか。資本主義を止めれば GHG も消えるともいえるのだろうか。チャクラバルティを批判する者たちは、この問いにまともに答えることはできていない。ラスボスを倒せばすべてがきれいさっぱりと残余の敵までも消えてしまうハッピーエンドの冒険譚のように、気候危機は甘くない。この点、IPCC は、第 5 次評価報告書（第 1 作業部会報告書）から「よくある質問と回答」の中で、「排出を今すぐ停止したら将来の気候はどうなるのか？」への回答という形で簡潔に回答がなされている。そこでは「主要な人為起源温室効果ガスの寿命が長い結果として、過去の排出に起因する大気中濃度の増加は排出が止まった後も長い間持続するだろう。排出が停止されても、温室効果ガス濃度が工業化以前の水準にすぐに戻ることはない」とする。というのも、「二酸化炭素パルスの約 15～40% は、1000 年後もまだ大気中に存在している」からということが挙げられている（Intergovernmental Panel on Climate Change, 2013, pp. 1106-1107）。

この問題は、先のマルムとホーンボルグに倣えば、「文系の研究者が取り組むことではなく、気候科学者に任せておけ」ということになるのかもしれないが、それで本当に良いのだろうか。これは言い換えれば、人間の外側の環境は人間のような意思を持たないから「単一の自然」として扱い、それは人間の叡智でもって乗り越えられる障害でしかないと考える、デスコラがいうところのいわゆる「自然主義」の範疇に絡めとられているだけではないだろうか。気候危機が人災であることを認めるのであれば、気候の組成の変化によって生ずるヒトおよびノンヒューマンのすべてが被る災害への対処、さらに、その現場における五大（地・水・火・風・空）に触れ、そこで何ができるのかを考え、行動することが喫緊の課題になるのではないのか。このように考えた時、ただ犯人は資本主義であると批判することだけが人文・社会科学の仕事であるということの良いのだろうか。

こうした問題構成は、ちょうど資本主義によって荒廃した後の山脈において生命にはどのような続編の物語が展開しているのかを巡り、20 世紀初頭の鉄道敷設と木材生産のための開発が放棄されたオレゴン州の荒廃地におけるマツタケとヒトの関わり合いについて研究するアナ・チンの視座と通底する（Tsing, 2015）。なぜなら、どちらも「残されたもの」から目を背けることなく、向き合うという姿勢が共通しているからだ。気候危機の場合は GHG、オレゴンの荒廃地の場合はマツタケである。それはさしずめ『風の谷のナウシカ』の最後のシーンで、主（あるじ）が「墓所」において浄化後の戦争のない理想郷についてや、汚染に適応した現生人類を元に戻すテクノ

ロジ技術を持っていることを語ることに對して、ナウシカが清淨のみを追求し、汚濁を認めない姿勢を拒み、墓所を破壊し、汚濁とともに世界に留まり生きてゆくことを選んだことにも繋がる(宮崎, 1995, 第7巻)。そこには残されたものの視點がある。氣候が變化したのは、GHGが残余として地球表面に留まったからだ。留まった後の世界の中で、どのようにヒトとノン・ヒューマンが関わり合っていくのかを考えるためには、人間種が呼吸以外でCO²を追加的に排出し、それが長期間地球上に残ることの意味について考察するチャクラバルティの視點が必要だったと言える。

チャクラバルティへの批判は実に様々なものがあるが、少なくとも資本新世であることから目を逸らすといった類の議論をする批判者は、はっきり言ってしまえば、氣候危機とその被害を被る資本主義の犠牲者に関心があるのであって、氣候そのものには関心がないと言えよう。その意味で、彼らの思考には、氣候危機への対処という観點から、致命的な欠陥があると言わざるを得ない。

チャクラバルティは、氣候科学者のジェームズ・ハンセン (Hansen, 2009) や海洋科学者のデイヴィッド・アーチャー (Archer, 2009)、ガイア理論のジェームズ・ラブロック (Lovelock, 2009) らの研究を参照しながら、氣候の動きやその展開はほとんど生氣論 (vitalism) 的であると論じている (Chakrabarty, 2021, p. 53)。かれらは生き物と同じではないまでも限りなくそれに近い動きをする対象として氣候を観察しているわけである。彼のこの議論は、地球という惑星が安定しており、人間活動にとって勘案する必要がないという前提を「惑星漸進主義 (planetary gradualism)」と呼び、この前提を崩そうとしない論者を批判するウィリアム・コノリーと通底する (Connolly, 2019, p. 4)。

そしてチャクラバルティは、氣候變動問題に関わる多くの論者が一番触れたがらない「人口」というテーマに踏み込んでいる。彼は、まず人口の歴史を二つに分類する。一つが、産業化が進んだ後の非常に短いスパンの人口の歴史。もう一つが、ヒトを含む種の進化に関する深い歴史 (deep history) である。そして一人当たりの排出量は、氣候變動の政治經濟において、…是正が必要な論点を提出するためには確かに有用だが、富める者と貧しい者の双方が参加している、人間という種より大きな歴史を隠してしまう。これら二つの歴史を繋ぐカテゴリーは明らかに人口であると述べる (Chakrabarty, 2021, p. 61)。

ヒトを一括りにしてしまうことはカーボン・フットプリントの多い人間とそうでない人間に同じ有責性を課してしまうということからまさしく批判されているのだが、

この点についてはチャクラバルティが『ヨーロッパを周縁化する』の中で強調したメッセージを確認し、人類の有責性に関する彼の立場を理解することで、なぜ彼が種の歴史という主張へと至ったのかが分かるだろう。彼が同著で示したことは、ヨーロッパは近代を作り上げた唯一の創始者ではなく、それを目撃した者から刺激を受けた第三世界の知識人も近代構築の共同の創設者であるということだった。近代のグローバルなプロジェクトは、反植民地主義的な第三世界と呼ばれた地域に生きる近代主義者たちの手によって息を吹き込まれたのだった (Chakrabarty, 2000)。この議論を敷衍して言えば、GHG 排出に対して明らかに重い責任を負う者とそうでない者がいる一方で、現在の開発途上国と呼ばれている国々も世界資本主義システムの中に組み込まれていることが示唆される。そうである以上、気候危機に対してかつて第三世界と呼ばれた地域で CO² を追加的に排出する仕組みに関わっていない人間を探すほうがむしろ難しくなっているのである。

ただし、この議論は一步間違えれば、地球全体にとって爆発した人口を減らし、調整した方がいいという結論に至り、場合によっては戦争や感染症の蔓延を通じた人口減少が必要であるといったネオ・マルサス主義的な議論に陥る危険性もある (Cf. 前田 & 蓮井, 2021, 第 6 章)。そうした罠に陥らないようにするために鍵を握るのが「生息可能性 (habitability)」の視座である。「生息可能性」では、人間が他の動植物の上位に位置するのではなく、様々な種と同じ対等な位置に自らを置きつつ、ともにこの地球上でのちをどう繋いでいけるのかが鍵となる。宇宙物理学者が他の星の探査や研究を進める時に重要なのが、その惑星における生命の生息可能性の視座である。ハンセンもラブロックも、もともとは金星と火星をそれぞれ研究対象としていた。彼らは惑星の大気の組成を研究しており、CO² の濃度が惑星の生息可能性を決定することを理解していたため、地球における CO² 濃度の短期間での上昇が生息可能性に与える影響に注目し始めたのだった (Chakrabarty, 2021, p. 75)。この生息可能性の概念の対極に位置するのが「持続可能性 (sustainability)」である (Chakrabarty, 2021, pp. 81-87)。「持続可能性」の概念には、ヒトがその未来を予め想定し、仕組みが回るようにするために逆算して現在のシステムを構築することの重要性が示唆されている。つまりそれには、対象となるモノを脱政治化して管理するという含意がある (Blühdorn, 2016)。人間が霊長類の頂点に立ちながら、他の生物の管理を考えるとという発想である。一言で表現すれば、時間軸を伴った統治の論理と言えよう。

チャクラバルティも明確に論じているように、生息可能性の問題は、この地球とい

う惑星が生息にとって優しいかどうかであって、生を規律、国家、資本の問題に繋げる生政治の問題系とは別物として扱うべきであるとしている（Chakrabarty, 2021, p. 83）。持続可能性と生息可能性の間には、関心の軸が管理か命かという埋めがたい溝が存在しており、それは根本的な相違点であると言えよう。

IV. 人新世から見えてきたヒトの共同体の限界

前節で論じたように、チャクラバルティは気候危機の文脈で語られる人口という統治の生権力の視点に絡めとられないようにするために、生息可能性の視点を接続した。この点に彼の議論の独自性があると言えるが、この接続を意味あるものにするための鍵を握っているのが政治思想の刷新である。以下ではチャクラバルティがこの点についてどう考えているのかを見ていきたい。

1. 海面下において国家は国家であり続けられるのか

政治思想の分野における人口という問題系の取り扱い方についてチャクラバルティは、17世紀以降の政治思想は人間の生命と財産を守るという考え（the idea of securing human life and property）に基づいており、この思想は憲法的にも依然として人間の数には無関心であると論じている⁽³⁾。人間の総数がどれくらいかということとは関係なく、すべての人々は同じ権利を持っていなければならない（Chakrabarty, 2021, p. 212）。なぜ憲法が登場するかといえば、ジョン・ロック的な生命と財産の保障を制度的に裏付けているのが憲法上の人権規定だからである。そこでは人間の総数への関心が記されることはない。そうした人間の総数への無関心は、人類がどれだけ要求しようと、地球は常に人間による政治的プロジェクトを永久に支えるために十分な資源を提供しようという広く行き渡った想定を生み、生態系への無関心へと繋がったという（Chakrabarty, 2021, pp. 90-91）。

しかし、権利で保障された人間の繁栄の追求のために天然資源の開発を進めれば進めるほど、人類はこのマテリアルな惑星の抵抗に直面するという逆説が立ち現れる。チャクラバルティは、ホルクハイマーとアドルノの『啓蒙の弁証法』の冒頭にある「進歩的思想という、もっとも広い意味での啓蒙が追求してきた目標は、人間から恐怖を

(3) 人口というテーマに取り組んだのはミシェル・フーコーであったが、政治思想史の中で「人口」を議論の中心に据えた人物はそれほど多いわけではなく、その意味でかなり例外的であったと言える。

除き、人間を支配者の地位につけるということであった」(ホルクハイマー&アドルノ, 1990, 3頁)というくだりを引用し(Chakrabarty, 2021, p. 217)、政治思想の伝統が、生命と財産を確保するための人間の諸活動による気候の安定の破壊をむしろ助長してきたことを批判している(Chakrabarty, 2021, p. 91)。そして、近年台頭している多くの権威主義的指導者や政党が掲げるビジョンである世界の再野蛮化という危険は、国家の最重要目標である国民の生命と財産の保護という伝統的な政治思想の中核的価値がもたらした帰結ではないのかということを示唆している⁽⁴⁾。

チャクラバルティはこのような地球からの逆襲という問題を象徴するようなエピソードを紹介している。それは後にマーシャル諸島共和国の国連大使となったフィリップ・ミュラー(Phillip H. Muller)による2009年のスピーチである。すなわち、この数十年での海面上昇によって島々は海に沈もうとしているが、「もしある国が海面下に沈んだとしても、その国は依然として国家なのだろうか。その国は依然として国連に席があるのだろうか」(Chakrabarty, 2021, p. 95)という問いかけであった。これは政治的共同体を構想する際に捨象できた舞台背景のアニメート化(舞台背景が動き出したということ)であり、もはや政治思想はそれらの背景を捨象することを許されなくなることが示唆されている。これは伝統的な政治思想の致命的欠陥にもなりかねないエピソードである。チャクラバルティは、このエピソードをかつて第三世界として括られていた開発途上国に住む人々が世界中で経済的豊かさを目指しているという文脈と繋いで紹介している。彼は、気候変動とも相まって高温で過酷になっているインドでの生活がエアコン一台を導入することで随分と快適になるが、そうした大規模な導入がさらなる気候変動を加速させるというパラドキシカルな事例を紹介し、いまだ「第三世界」は自然/社会の二分法の下、発展を追求する構図の中に埋め込まれており、その脱却は極めて難しいことを強調する(Chakrabarty, 2021, Ch.4)。

このことを敷衍すれば、やはり国家は、国民の生命と財産を守ることが至上命題であるという社会契約論以降の政治思想を具現化する忠実な事例であるということが分かる。各国がそれを目指すなか、海に沈んでしまう国が生まれる危険性についての注意はそこに存在していないのである。これをノン・ヒューマンの視座から言えば、ヒトの活動に呼応する形で、海面が政治的主体としてその活動を認めないために立ち上

(4) 政治思想史の中でこの問題への先駆的研究は藤原(1991)であった。資本主義社会の現在とドブソンの提唱する生態系主義を突き合せながら、後者の重要性に気づいていた辺りは、今日のガイア理論への接続を予感させるものといえる。

がってきたとでも言えるだろうか。

2. 「大地に根付くものたち」の承認か、それとも地球工学か

政治思想において、例えば西洋の社会では、すべての人間が自律的な主体であることが法によって認められており、それゆえに各人の行動には有責性が伴う。こうした主体観の基礎にあるのはジョン・ロック的な人格概念である (Chakrabarty, 2021, pp. 209-210)。すなわち、財産を自由に処分できる理性を備えた人間だけが政治主体、そして法主体になることが許されるのである。この点についてチャクラバルティは、ラトウルとの対談において政治的な架橋がまったくなされていない現在の「本質的な断絶 (real disconnect)」であると喝破している。ここで彼の言う架橋のない二者とは、歴史上で承認されてきた主体と、惑星時代の新しい主体のことを指している。つまり、人間もその一部を構成する「大地に根付くものたち (the earthbound)」をどのように主体として捉え、それを政治制度として構想していけるのかが我々の挑戦となるだろう。

ただし、二人は、こうした政治主体に関する問題は当初から存在していたというよりも、世界経済の一体化が進むところまで進みグローバルなもの (the global) が見えてきた結果、地球という惑星 (the planetary) が登場したという認識で一致している点は確認しておきたい⁽⁵⁾。

この惑星の政治主体性を認められるかどうかがかれらにとっての賭け金になっている一方で、酷暑や集中豪雨のような地球の反応に一切の主体性を認めず、それらを単なる出来事として理解し、自然災害などはいまや無視できないほどの規模になっているにもかかわらず、それらに例えば太陽光を遮る人工の雲を作るテクノロジーなどで対処しようとする地球工学 (geo-engineering) を支持する政治勢力もいる。こうした動きは、惑星のいかなる政治的主体性も認めないという意味で、チャクラバルティなどとは真逆の方向に進んでいると言えよう (Chakrabarty, 2021, p. 213)。

3. 国連の限界

1と2の議論を敷衍すれば、この地球上 (海の上) にあって人民の生命と財産を守

(5) この点は、チャクラバルティが指摘しているが、ジョン・ロックが『統治二論』を執筆した17世紀末から18世紀にかけての当時、新大陸を想起しつつ、人間にとって土地は水のごとく潤沢にあるという前提で書かれていた (Chakrabarty, 2021, p. 199)。

るために領土を保有している国家が、国際社会で選ばれた主体ということになる。この点、チャクラバルティは、国連（敷衍すれば国際社会）の本質的問題にまで議論を展開している。例えばイスラエル／パレスチナ紛争のケースなど、政治の局面においては期限を決めて解決に導かない場合が多い。しかし、気候危機が生じている状況で科学者はいつまでに X をしなければ、Y という結果になってしまうことから、そうならないようにするための逆算に基づいたカレンダーを提示する一方で、外交交渉でのカレンダーは科学者が提示するものと一致するわけではない。2015年のパリ協定で明らかになったことは、すべてのアクターが協定で定めた目標を達成したとしても十分ではなく、大気中のGHGを除去できる新技術が作り出されなければ、危険な気候変動を回避することはできないという事態であった（Chakrabarty, 2021, pp. 214-215）。ヒトが政治的主体となって外交は繰り返されるが、それはあくまでノン・ヒューマンがその結果に対してどのように応答するのかを知り得ない状況下における交渉である。危機の回避は、大気からGHGを除去する二酸化炭素回収・有効利用・貯留（CCUS）のような技術が実質的な効果を持つようになるまで待つしかないという者もいるだろう。チャクラバルティは、こうした状況を「統治の深刻な危機」（a deep crisis of governance）であると述べており、国連はそれに対処できる組織ではないとまで言い切っている（Chakrabarty, 2021, pp. 214-215）。

V. 自律的な政治的主体の終焉とコスモ・ポリティックスの浮上

こうした地球的問題群解決に向けた政治的主体に関する袋小路とも言える状況に対して、人間の対処の仕方をめぐって様々な議論が存在する。

1. ヒトの政治的主体性が孕まれる問題性

政治的右派は先に指摘したノン・ヒューマンの政治的主体性を認めずに地球工学というテクノロジーで気候危機に向き合おうとする。チャクラバルティは、地球工学の代表的論者であるデイヴィッド・キース（David Keith）が地球工学を擁護する背景として、生命愛（biophilia）をもつ人間が自然をケアする行為の延長上に地球工学が登場すると考えていることを紹介している。この姿勢に対するチャクラバルティの回答は、生命愛はただ限定された「世界」との相互性を再生産するだけである、というものであった（Chakrabarty, 2021, p. 193）。生命愛に基づく地球工学は人間に見えるものだけに適用が可能となる。なぜなら、そのテクノロジーの適用に人間が知り得な

いミクロな無数の環世界がどう反応するのかわからないからである。地球をケアしようとした行為が、かえって地球からの逆襲を受けるという逆説的状况にさらに別の「ケア」を施すとすれば、それは他者への倫理の実践ではなく、もはや単なるシャドーボクシングになるだろう。加えて、人間の生命を脅かす微生物やウイルスを生命愛の対象とすることができるのかという別の問題も残される。そう考えると、生物界の動的平衡を崩さないよう予防原則に則って、注意深く行動するという選択肢がより謙虚な姿勢ということになるのではないだろうか。

対照的に、政治的左派の一部はノン・ヒューマンの政治的主体性を認めないで、むしろ専ら責任主体である人間の意識変革と行動変容によって気候危機に向き合おうとする。その例として、人類の力があまりにも大きくなりすぎた時代に入ったからこそ、その力の使用に対して賢慮や責任感が必要であるといった立論が挙げられる(Chakrabarty, 2021, pp. 162-163)。地球を管理する代理人として行動していくべきであるといった議論がその典型とも言える(いわゆるスチュワードシップ論)⁽⁶⁾。チャクラバルティは、こうした立場を取る者としてローマ法王フランシスとアマルティア・センを挙げている。彼らの立場は、それぞれ宗教的出自が違うものの、類似の代理人論として理解できる。この立場もやはりあらゆる種のすべてのことを知りえず、その行動如何によっては意図せざる結果を伴う可能性が残ることから、チャクラバルティはこのような立場に慎重な態度を示している(Chakrabarty, 2021, p. 148)。なぜなら、気候危機の問題を人間の行動に関する道徳問題として理解すれば、そこには道徳的な生活を選び取っていく選択の自由があるということが暗示されるが、その自由の領域がかつてカントが論じていた時代と同じようには人間の側に残されていないのではないかとチャクラバルティが考えているからだ(Chakrabarty, 2021, p. 146)⁽⁷⁾。その意味で、資本主義を継続するのか、それともそれを止めるのかの選択を人々に問い続ける手法は、自由な人間主体の手にすべてが委ねられているというカント以降の伝統的

(6) 同様に、ルークも、人新世に入って人類の活動の結果、地球が自己調整ができなくなっている状況下で、「自己調整」ができるように「介入」することを正当化しようとする人新世中心主義(Anthropocenarianism)を警戒している(Luke, 2017)。

(7) 別の論稿で、チャクラバルティは人新世において、政治思想の中核を占める自由論だけでなく、ノン・ヒューマンに向けた正義論がないことを問題視している(Chakrabarty, 2017, p. 32)。感覺性(sentience)の有無で権利を動物にまで拡張する議論なども登場しているが、それが例えば環世界などの知りえない領域には適用できないことがわかっているため、議論として欠陥があることを示唆している(Chakrabarty, 2021, pp. 134-135)。

な政治思想の前提に立脚し続けていることを暗に示唆していることが逆照射の形であぶり出されてくるのがわかる。

政治的主体としての人間が道徳的に望ましい選択肢を選び取っていくという点について言えば、「解放 (emancipation)」の概念も問題を孕んでいると言える。この点について、ドブソンは、これまでは「人間」を頂点とし、その下に他の種が並んでおり、人間が彼らに働きかけるのを黙って待っているという状態を意味する「存在の階層性」が2000年以上にわたって西洋の思想を支配してきたとする。しかし、それが人新世に入って崩れようとして、この新しい構成においては人間はますます他律的な動物として世界を経験するようになり、自律性の行使としての解放はほとんど意味をなさなくなる、としている (Dobson, 2022, p. 132)。

2. コスモ・ポリティックス

地球工学のアプローチも、解放の担い手として自律的な政治的主体となり人間の行動を変革するというアプローチも、人間から見える「限定された世界」への働きかけになってしまうことから限界を孕んでいるとすれば、他にどのようなアプローチがありうるのだろうか。この点、生態系へ寄り添った先住民 (例えば、アボリジニやアマゾンの先住民など) の生活から、忘れられた共生の智慧を引き出す活動などは、近代システムから零れ落ちた実践例として注目されてよいだろう。これは生物多様性が、遺伝子、種、生態系の組み合わせから生まれる「複数の自然」の例証といえることから、この「多自然主義 (multinaturalism)」 (Latour, 2004, p. 211) が、上記の問題回避の鍵を握るのではないだろうか。すなわち、多様な自然との相関／相環性の中から生まれてくる経験知は、世界の中にある単一の知識ではありえないことから、単一世界もありえないことになる (例えば、ヒトが木と向き合うというとき、いかなるヒトがいかなる木と向き合うのかは一義的には決まらない。その木は直根性の広葉樹なのか、菌糸が絡んだ木なのか、苔むす木なのか、伐採された木なのかなど)。ここからコスモ・ポリティックス (cosmo-politics) へと進むことができる。ここでいうコスモとはコスモスを指し、コスモスとはヒトとノン・ヒューマンの無数の存在による総体を指す。イザベル・スタンジュールは、「法則の物理学 (the physics of laws)」と「現象の物理学 (the physics of phenomena)」を対比し、学問としては前者が勝利したと示唆しているが、彼女が目指するのはむしろ法則と現象という両者の複雑な絡み合い

の方である(Stengers, 2010, p. 186)⁽⁸⁾。これを気候危機の文脈に当てはめるとすれば、物理の諸法則は、諸現象が生み出されるエコロジカルな状況の中に内在したものであり、現象としての気候はヒトの介入が触媒となった結果ということになるが、それは直線的な因果関係で理解できるものではないということになるだろう。紙幅の関係上、到底スタンジュールの理論の全貌を論じることはできないが、鍵を握るのは、ヒトはあらゆる多様な複数の自然を同質化させていかにように注意を払うということである。同質化させていくというのは、例えば資源であるとして人間の利益に供するために伐採や採掘を強化して、一方的に強奪し、「有」から「無」にしていかにないということである。

このように考えれば、先住民が自然に内在して得てきた経験知・暗黙知を実践・継承してきたことや、空気と水が滞留して窒息している大地に対して、いのちの流れを再び取り戻そうとする人々がいることなどは、地球工学や理性的近代人による自然の管理でもない、自然に対するヒトの「共生の作法」であると言えよう(例えば、田中, 2008; 高田, 2020 を参照)。

まとめると、ヒトは地球の自己調整機能を妨げないように努力することができ、資本主義の根本的な見直しは当然その一つの選択肢となりうるものの、他方で GHG やプラスチックが蓄積したり、開発で山や川が荒廃している状況に対してその現場に赴き、いのちの流れを蘇生させる行動も重要な選択肢になるということである。これは資本主義的蓄積によって生み出される物質代謝の亀裂には注目するものの、亀裂が起こった当の自然の中であって、いのちの流れを経験したことやそれを蘇生する経験などを言語化することには関心がない者たちに対する戒めである。

VI. コスモ・ポリティックスに開くために

以上、あえて批判の渦中にいたチャクラバルティの立論の意義とそこから引き出せる含意について論じてきたが、ここからはその上で「力」に関するチャクラバルティ

(8) この点で興味深いのが、同じ地球に向き合っているにもかかわらず、その手法と帰結としての政治的含意において真反対の結果に至るのが、地球システム科学(ESS)とガイア理論のそれぞれのアプローチの違いである。なぜなら、ESSは地球の複雑な動きを科学的に外側から観察し(Chakrabarty, 2021, p. 78)、そのメカニズムを解明することから、地球自体が政治的主体としては決して登場してこないのに対して、ガイア理論ではガイア(地球)は(生物学でいうところの生物ではないものの)単一の存在なのであり(Chakrabarty, 2021, p. 216)、したがって政治的主体性を帯びた存在となるからである。

の議論の課題を確認し、その先に進むための可能性について論じる。

1. 力についての課題

先述した通り、チャクラバルティはヒト種の人口の膨張が「地質学的な力(geological forces)」になったことを力説する。彼は、地球に負荷をかける物理的な力を force とする一方で、人間間の関係性を考えるときに power という語を使用している (Cf. Chakrabarty, 2021, p. 61, 83)。他方で、チャクラバルティは建国間もないインドにおいて当時のネルー首相が、国内の潤沢な自然(例えば山)を「力の源(source of power)」と捉えていることに注目しているが、ここでの力はインドの国力に繋がっている使用法であった。関連して、ボヌイユとフレソズは「地—権力(geo-power)」を「物質、エネルギー、「自然資本」の流動の収支、「生態系サービス」市場、「地球システム」の構成要素とプロセスの制御と管理、予見や予測、そしてグローバル・シミュレーションのための手段、均質な空間としての様々な場所を通約化することなど」を行う作用として概念化している(Bonneuil & Fressoz, 2016; 深谷, 2022も参照)。チャクラバルティは自覚的に地—権力という概念を使用してはいなかったが、先のインドの事例はこうした用語法の先駆けだったのではないだろうか。すなわち、国家の人口を統治するための権力(生権力)のみならず、その人口を活かし、さらには国家を強化するために大地を利用することで手に入る力を地—権力と理解しているのである。

上記のようなボヌイユとフレソズの「地—権力」も、チャクラバルティのインドの事例で使用されていた「力の源」の用語法も、どちらもより統治に特化し、政治的共同体が介在する場合に定義を狭めたものとして理解することができる。これは、かつてエリザベス・グローシュが地球上の生命を活かす力として描写した「大地の力(geopower)」(Yusoff, et al., 2012)とは異なる使用法である。グローシュは、地球表面を生息可能にしている状態から、一方的な収奪ではない純粹贈与として与えられるエネルギーのことを「大地の力」と呼んでいる。その視点がチャクラバルティには見いだせなかった。

もう一つ、ヒトのみに注目するのではなく、異なる種の絡み合いに注目するマルチスピーシーズ人類学の流れに位置づけられるステファン・ヘルムライヒは、地球上の動植物に目を向ければ、相利共生の種もいれば、片利共生の種も存在し、そうした複雑な種間の関係性を総称して、「共生政治(symbiopolitics)」と呼んだ(Helmreich,

2009, p. 14)。単一の種ではなく、複数種で生が営まれていることの中にある政治性を見ていくという視座である。この観点からすれば、グローシュの「大地の力」の用語法に倣えば、「共生力 (symbiopower)」という概念も成り立つはずである。このことをさらに展開すれば、ヒト種が現在、生息可能なのは、ちょうど地球が灼熱や極寒にならない惑星間関係（太陽との距離）があることや、生物多様性が保たれた状態の種間関係（道具や火の使用が偶然可能になり、他の種をヒト種の栄養として計画的に取り込むことができるようになったこと）など、諸関係の網の目の中に偶然入ることが可能だったからという結論にも至るはずである。

グローシュとヘルムライヒのどちらの「力 (power)」にも共通するのは、生息可能性の地平を切り拓く力であって、群れとしてのヒト＝人口をコントロールするための力ではない点である。日本語では権力、力、電力、勢力など多義的な意味が含みこまれる概念であるからこそ、それが支配のための用語なのか、生を内在的に活かすのための用語なのかは、明確にしておく必要があるだろう。チャクラバルティに限らず、人文・社会科学の分野でパワーを使用する多くの論者は、その意味を支配・統制の側面に力点を置いて理解する場合は圧倒的に多く、「支配なく他を活かす」パワーの視座が欠落しているケースがほとんどである。複合危機に直面する人類が、この理解の欠落をどのように補っていけるかが今後の重要課題となると言えよう。

2. 3つの可能性

政治的主体性がヒトにしか帰属していない状態の国家が大勢を占めている状況で、ノン・ヒューマンにもその政治的主体性を開くには、ヒトがその開く行為の重要性を知覚する必要がある。ヒトがロゴスを通して「人民の、人民による、人民のための」合理的な統治の思考を進めていく限り、その気づきが涵養されていくこともない。

大地や他の種にヒトは完全に依存し、活かされているということに気づくには、さしあたり3つの方法があり得る。1つ目が機能的なプラネタリー・ヘルスを理解する方法であり、2つ目がプラネタリーな想像の共同体に資する言語活動に従事する方法である。そして3つ目が、近代のど真ん中にあっても万物が呼吸しあっている世界を体現する共同体を想起する方法である。

まず機能的なプラネタリー・ヘルスとは、ヒトと大地は微生物を媒介して繋がって

おり、大地をワン・ヘルスという括りで捉えることを意味する⁽⁹⁾。近代化の中で人類は大地を遠ざけてきたが、例えば(1) 森では微生物が存在しなければ植物も森も育たないということ、(2) 植物の根と微生物の共生関係が人体の消化器官である腸の上皮細胞と腸内細菌の関係性に酷似しており、腸内環境が悪化すると人間の心身にも悪影響を与えること、(3) 森の土壌環境の改善とヒトの腸内環境の改善は連動していること、(4) 大地もヒトも微生物の働きで生かされており、そうした無数とも言える微生物はいのちを繋げていることなどが重要な視点である。これらの繋がりが、単に環境問題を解決するというに留まるものではなく、土壌改善からヒトと地球の健康を考えるというプラネタリー・ヘルスの考えの根拠となっている。

2つ目の方法では、言語は(例えば詩や歌という形をとって)自然の美しさや自然への感謝を表現するためのツールともなり、それが現地語による想像の共同体としてナショナリズムを醸成するのはまったく別の経路で、「プラネタリーな想像の共同体」をつくることに繋がるかもしれないことを示唆している。ヒトはある特定の国家に住んでいると同時に地球にも住んでおり、この二重性に注目することが突破口を開くかもしれない。本来はヒトは圧倒的なまでに大地や他の動植物に依存していることから地球との自然契約を結ぶくらいでもいいはずであり、惑星そのものを想像の共同体として捉えることも可能なはずである。それを可能にするのが自然の驚異に目をみはる感性を意味する「センス・オブ・ワンダー」(カーソン, 1996)ということになるだろう。

この点、チャクラバルティは種思考を提唱したが、それは物語や歌などのアートに訴える表現形式に意味がないということの意味しない。むしろ逆で、彼は危機の時代に、そうした試みが何らかの触媒となり、意識変革へと繋がっていく可能性を信じている(Chakrabarty, 2016, p. 112)。ここでもやはり鍵となるのは人間なのだが、それを人間だけに注目して行動変革を語るのではなく、他のいちの流れに連なっていく作法を示していけるかは、大地とマルチスピーシーズを意識できるかどうかにかかっていると言える。

3つ目の、万物が呼吸しあっている世界を体現する共同体ということで想起されるのは、石牟礼道子の『苦海浄土』である(石牟礼, 1969)。登場してくるのは石牟礼道子本人である。そこにはヒトならざるものの世界と通じる道子の世界があった。近

(9) ワン・ヘルスのアプローチの例としては、ヒト・動物・環境を一つの連続体として捉え、それをアフリカに適用したものとして Alicia and Sharp (2020) を参照。

代社会の中であって、チツソが垂れ流す水銀のせいで有明海の魚介類は完全に汚染され、それを口にした人々は水俣病になってしまった。生きていたころの有明海を知る道子。人ならざるものへと変容したかつての人間である水俣病患者に何の医療行為もできないがただそばでその苦しみを自分の苦しみであるかのごとくうけとめる道子（「もだえ神」となった道子）。そこでは、有明海の生物と道子の関わり合いから、近代社会には消えてしまったと思われるアニミズムの世界が近代社会の中に立ち現れてくるのだ。苦海浄土が表す共同体は決して普遍化できる類のものではないものの、ノン・ヒューマンとの共生のあり方を理解するには、この作品から政治的共同体を構想する者が学ぶべきものは多い。人新世の政治的共同体には、所有権をもつ個人に限定されない新たな主体の立ち上げがどうしても必要になる。そのとき『苦界浄土』を多自然主義的観点から考えれば、ノン・ヒューマンとの共生を示す参照可能な事例は、津々浦々で見つけることができるはずだ。残された課題は、そうした共同体を政治的共同体とはまったく別のものとして取り扱わない姿勢の方なのかもしれない。

VII. おわりに

ここまでの議論を整理すれば、チャクラバルティの近年の議論の基本的なモチーフは以下の通りとなる。すなわち、ヒト種が呼吸以外の追加的な GHG を垂れ流すのに対して地球が黙っていなくなった。しかし、それに対処する人間はヒトの間だけでの対処に留まってしまっている。なぜなら、集合組織である政治的共同体の担い手が人間に限られることが政治思想の中核的な前提となってきたからだ。したがって、気候危機や感染症危機などの回避はされないうまま、国家の存在意義にもかかわる問題の噴出も継続していく。これら一連の問題から目を逸らさないことを力説するというのがチャクラバルティの議論の流れであった。

本稿では、第1節から第4節において、このチャクラバルティの立論の基本線を資本主義との関係を踏まえながら確認し、第4節以降では、彼の議論では深めきれていない課題について論じた。その課題の一つが、ヒトがヒト種以外のあらゆる動植物や山川草木に依拠していることに意識を開くことであった。われわれは人間が単体では生きられず、他者や他の生物、自然に依存するものだという、もっとも重要なことを自覚することが難しくなっている。しかも、そこには「一回性」のものではなく、他者が存在しているから自らが存在できているという感謝に基づく「循環性」のものであることへの自覚の欠落という問題までもが伴っている。

例えば、アマゾンの森林伐採は一見アマゾンで起こっていることから、自分には関係ない事象であると考えられるかもしれない。しかし、その森林伐採は主として、大豆などの作物の栽培や牧場での牛の放牧のために行われる。牛肉の需要が高まれば高まるほど、アマゾンなどの広大な森林は破壊されてきた。つまりわれわれが牛肉の消費を継続していることで、アマゾンの森が姿を消している。こう考えると日常生活と森林伐採がどれほど身近なものであるかがわかるだろう。こうした事例は少し掘り下げれば無数に出てくる。しかし、われわれは所有物の最たる例である「貨幣」という媒体によって、自分たちが手にするものがどこから来るのか気にすることなく所有でき、しかもその貨幣の獲得のための知の習得に躍起になることで、それ以外の生の環へと連なれなくなっている。このように人間も自然の一部であり、より大きな動的平衡の一部でしかないとすれば、地球の自己調整を阻み続ければ、その先に絶滅の選択肢が浮かび上がることはやむを得ないかもしれない。その選択肢を回避したいのであれば、世界中の政治的共同体の中核を担い、人々の思考様式を司っている政治思想のあり方の転換が鍵を握るのである。

参考文献

- Alicia, D., & Sharp, J. (2020). Rethinking one health: Emergent human, animal and environmental assemblages. *Social Science and Medicine*, (258), 1-8.
- Archer, D. (2009). *The long thaw: How humans are changing the next 100,000 years of earth's climate*. Princeton University Press.
- Blühdorn, I. (2016). Sustainability—post-sustainability—unsustainability. In T. Gabrielson, C. Hall, J. M. Meyer, & D. Schlosberg, *The Oxford Handbook of Environmental Political Theory* (pp. 259-273). Oxford University Press.
- Bonneuil, C., & Fressoz, J.-B. (2016). *The shock of the Anthropocene: The Earth, history and us*. (D. Fernbach, Trans.) Verso ((2018)『人新世とは何か:「地球と人類の時代」の思想史』野坂しおり(訳)、青土社) .
- Chakrabarty, D. (2000). *Provincializing Europe: Postcolonial thought and historical difference*. Princeton University Press.
- Chakrabarty, D. (2009). The climate of history: Four theses. *Critical Inquiry*, 35(2), 197-222.
- Chakrabarty, D. (2016). Whose Anthropocene? A response. In R. Emmett, & T. Lekan (Eds.), *Whose Anthropocene?: Revisiting Dipesh Chakrabarty's "Four Theses"* (pp.103-113). RCC Perspectives: Transformations in Environment and Society.

- Chakrabarty, D. (2017). The politics of climate change is more than the politics of capitalism. *Theory, Culture & Society*, 34(2-3), 25-37.
- Chakrabarty, D. (2021). *The climate of history in a planetary age*. University of Chicago Press.
- Connolly, W. E. (2019). *Climate machines, fascist drives, and truth*. Duke University Press.
- Descola, P. (2005). *Par-delà Nature et Culture* [Beyond nature and culture]. Gallimard ((2020) 『自然と文化を越えて』小林徹(訳)、水声社) .
- Dobson, A. (2022). Emancipation in the Anthropocene: Taking the dialectic seriously. *European Journal of Social Theory*, 25(1), 118-135.
- Hansen, J. (2009). *Storms of my grandchildren: The truth about the coming climate catastrophe and our last chance to save humanity*. Bloomsbury USA ((2012) 『地球温暖化との闘い：すべては未来の子どもたちのために』中小路佳代子(訳)、日経BP社) .
- Haraway, D. (2015). Anthropocene, capitalocene, plantationocene, chthulucene: Making kin. *Environmental Humanities*, 6(1), 159-165.
- Helmreich, S. (2009). *Alien ocean: Anthropological voyages in microbial seas*. University of California Press.
- Intergovernmental Panel on Climate Change. (2013). *Climate change 2013 - The physical science basis*. Intergovernmental Panel on Climate Change.
- Latour, B. (1997). *Nous N'avons Jamais Été Modernes: Essais D'anthropologie Symétrique* [We have never been modern]. La Découverte ((2008) 『虚構の「近代」：科学人類学は警告する』川村久美子(訳)、新評論) .
- Latour, B. (2004). *Politics of nature: How to bring the sciences into democracy*. (C. Porter, Trans.) Harvard University Press.
- Lovelock, J. (2009). *The vanishing face of Gaia: A final warning*. Basic Books.
- Luke, T. W. (2017). Reconstructing social theory and the Anthropocene. *European Journal of Social Theory*, 20(1), 80-94.
- Malm, A., & Hornborg, A. (2014). The geology of mankind?: A critique of the Anthropocene narrative. *The Anthropocene Review*, 1(1), 62-69.
- Stengers, I. (2010). *Cosmopolitics*. University of Minnesota Press.
- Tsing, A. L. (2015). *The mushroom at the end of the world: On the possibility of life in capitalist ruins*. Princeton University Press ((2019) 『マツタケ：不確定な時代を生きる術』赤嶺淳(訳)、みずぎ書房) .
- Yusoff, K., Grosz, E., Clark, N., Saldanha, A., Yusoff, K., Nash, C., & Grosz, E. (2012). Geopower: A panel on Elizabeth Grosz's chaos, erritory, art: Deleuze and the framing of the Earth. *Environment and Planning D: Society and Space*, 30, 971 – 988.
- Žižek, S. (2011). *Living in the end times*. Verso ((2012) 『終焉の時代に生きる』山本耕一(訳)、国文社) .
- カーゾン, R (1996) 『センス・オブ・ワンダー』上遠恵子(訳)、新潮社 .
- ホルクハイマー, M & アドルノ, W・T (1990) 『啓蒙の弁証法：哲学的断想』徳永恂(訳)、岩波書店 .
- 宮崎駿 (1995) 『風の谷のナウシカ』徳間書店 .
- 高田宏臣 (2020) 『土中環境：忘れられた共生のまなざし、蘇る古の技』建築資料研究社 .

- 深谷舜（2022）「複眼的思考による〈人新世〉の深化—クリストフ・ボヌイユ、ジャン＝パプティスト・フレソズ『人新世とは何か』を読む—」『クアドランテ』（24）, 297-307.
- 石牟礼道子（1969）『苦海浄土：わが水俣病』講談社．
- 前田幸男 & 蓮井誠一郎（2021）「環境と批判的安全保障」南山淳 & 前田幸男（編）『批判的安全保障論：アプローチとイシューを理解する』（pp.98-120）、法律文化社．
- 田中克（2008）『森里海連環学への道』旬報社．
- 土佐弘之（2020）『ポスト・ヒューマニズムの政治』人文書院．
- 藤原保信（1991）『自然観の構造と環境倫理学』お茶の水書房．

**Assumptions by “political thought” that matters in the Anthropocene:
Through examining Dipesh Chakrabarty’s
“The Climate of History in the Planetary Age”**

<Summary>

This article emphasizes that humankind cannot find solutions to today’s crisis by focusing only on the problem of capitalism, including the future of existence in the first place. In this sense, this article, taking a cue from Dipesh Chakrabarty’s argument that understands the crisis emerging as a “negative universal history” from the totality of human activity, will discuss where his creativeness is in a series of discussions.

In sections 1 and 2, the article will confirm why the capitalism argument alone is not enough to deal with the current complex crises. It will then discuss in Sections 3 and 4 why, paradoxically, even though the situation cannot be autonomously determined in the Anthropocene, humans coping with crises are limited to arrangements among humans alone, which is a problem of the core assumptions of political thought. Section 5 will conclude by showing the missing pieces of Chakrabarty’s argument and adding the complements in a way that allows for connection to a future discussion that follows.